

日本プロ野球における観客動員の「実」態

Welcome to the real yakyu world

1K03A220-9 麦谷 林太郎

指導教員 主査 リー トンプソン 先生 副査 石井 昌幸 先生

1. 研究の動機と目的

「観客動員」とは長い間プロ野球ファンにとって球団人気のバロメータでありながら何か胡散臭いイメージを抱かせる響きであった。いつ頃からかははっきりしないがプロ野球は観客動員をごまかすのが当たり前になっていたからである。それを許す環境を作る要因が実数発表をしないシステムだった。オーナーも、スポンサーも、メディアも、選手も、ファンもそれを黙認していた。これが正されるのに半世紀かかったというのはあまりにも馬鹿げている。

球界再編問題を受けて迎えた2005年度シーズンからプロ野球はようやく正式に実数を発表することに決めた。実数発表へと切り替わった2004年度から2005年度にかけてパシフィック・リーグでは約10,684,000人から8,252,042人、セントラル・リーグでも約13,770,000人から11,672,571人と、ともに200万人以上の減少が明らかになった。正常になった2005年度から2006年度を比べるとパ・リーグが8,526,594人、セ・リーグが11,877,686人でありそれぞれ増減は20万人台である。このような事実を突きつけられると観客動員について考えるとき、多いときには1万人単位でさば読んでいたデータには、おおまかなイメージとして以上の価値は無くなってしまった。したがって実数発表になってはじめて研究の対象になったとも言える。筆者は幸運にもこのようなタイムリーな時期に卒業研究に取り掛かる機会を得たわけである。

実数発表2年目を迎えた2006年、時期尚早かもしれないが今の段階で実数発表をもとに、プロ野球の実態を探っていくというのが今回の研究の趣旨である。目的がこのように抽象的なものなので、おそらくこうなるだろうという予測しながら資料を集める、明確な目標に向かって突き進むといった研究にはなり得ない。したがってこの研究は全体的に見るのではなく、章ごと、節ごとに見ていただくのが正しい見方となることを最初に記しておく。そのうえで総括的に見て何か感じてもらえればよいと思っている。

2. 研究の方法

公式に発表されているパシフィック・リーグ、セントラ

ル・リーグのレギュラーシーズン全846試合の観客動員数をもとにすべての研究は行っている。つまり本研究で使用されるそれ以外2006年度のプロ野球観客動員についての数値はすべて筆者が作成したものである。

また、観客動員を語るうえで不可分な存在である球場について知らずに研究をすることはできないので、2006年度現在プロ野球で本拠地として使用されている13球場すべてに直接足を運んで、そこで得た知識、感覚を研究に盛り込んだ。

3. 各章の内容

第1章

プロ野球の観客動員が実数発表にいたるまでの歴史と、他のスポーツの実数発表の状況について述べる。

第2章

プロ野球で使用されている本拠地13球場について筆者が実際に見たことを中心に詳しく解説する。また、2006年度プロ野球の地方開催で使用された、あるいはされる予定だった地方球場のデータを示す。

第3章

本研究の核とも言うべき章である。2006年の観客動員を筆者独自の資料を利用してグラフなどで解説する。主な内容は、

1. 2006年度主催試合の基本的考察
2. オリックス・バファローズの本拠地問題
3. 地方開催
4. 新庄の引退宣言による影響
5. 松坂大輔の登板日
6. 曜日から見る観客動員
7. 月別観客動員

などである。前半の内容では特に満員率という収容人数に対する観客動員の割合のデータを重視した。5, 6節については人気という抽象的なものを数値上で確認することに挑んでいる。

第4章

現在のメジャー・リーグ、Jリーグなどの状況をもとに今後観客動員を増やしていくうえで何が必要かを考える。